

みころも公園と高尾みころも霊堂について

高尾駅から西側のみころも公園の中に、黄金色に燦然と輝くパゴダ風の建物がそびえています。労働省(現在の厚生労働省)が作った慰霊堂です。不幸にして働く中で亡くなった方々を慰霊するために労働者健康安全機構が運営する「高尾みころも霊堂」です。労災保険を原資として昭和47年に設立されており、毎年、産業殉職者合祀慰霊式が行われています。上皇両陛下におかれては天皇陛下、皇太子時代と在位された間に度々行幸啓・御臨席を賜り、日本の経済基盤を支えた人々に心を寄せられ御退位される直前にも献花をされています。

みころも公園の名前の由来が興味深いものがあります。かなた遠くの平安時代、藤原氏の陰謀による菅原道真の太宰府への左遷にあるとのこと。長官とは名ばかりの監視付きの蟄居同然の処遇であったとのこと、かつて宇多上皇からの信任厚き右大臣時代の京の都を思い、後継の帝である醍醐天皇から賜った御衣「みころも」の残り香を捧げて押し、毎日袖を涙で濡らす(自詠「涙を落とす 百千行」という漢詩を詠じたとのこと、名前のいわれとのこと。霊堂の北側の小高い丘に高尾天神社の中に皇居を拝している菅原道真の銅像が慄然と立っていますが、藤原一族から汚名を着せられ太宰府の地で無念の思いで果てた道真公の慰霊の塔でもあるかのようです(なお、道真の死後京での相続く天災疫病等を道真の怨霊の災いとして慰撫するため、藤原氏は北野天幡宮を慰霊のため寄進し氏神としたとのこと)。

高尾みころも霊堂の設計者は、病院建築の分野で著名な伊藤喜三郎という方です。ため池と霊堂との対比で陰と陽を織り込んだとのこと。

慰霊式の中で、宗左近さんが作った詩の朗読が昭和47年から行われています。遺族の思いに向き合った産業殉職者慰霊の詩 鎮魂曲「虹」です。宗左近さんは仏文学者であり「きけわだつみのこえ」の世代です。東大の同窓の多くが戦没者となったこともあり、生涯鎮魂の詩を作り続けたとされています。縁の深い生前の居住の地である市川市(市川市文学ミュージアム)、生誕の地である北九州市(北九州市立文学館)にて宗左近さんをしのぶ詩の朗読会等が行われているとのこと。北九州市におかれては、今般、稲田学芸員の御尽力により、宗左近さんの産業殉職者慰霊の詩に関する著作権の無償利用を認めていただきこの場を借りて感謝申し上げます。

「岸田稚魚の一句が壮絶である。『虹の下にありて死者との間かな』多分、あの世とこの世の間に立つのが虹である。そして、虹だけである」(宗左近「月の海」引用)とのこと。宗左近さんにとって虹は特別の意味があったようです。 賃金援護部長 大友 万